

赤十字NEWS

October 2015 Vol.905
<http://www.jrc.or.jp>



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。



台風18号などによる大雨(平成27年9月関東・東北豪雨)は、茨城県や宮城県を中心に甚大な被害をもたらしました。茨城県常総市では、発災から2週間余りが経過した9月24日時点でも被災者が避難所で生活をしています。体調を崩したり、片づけ作業中にけがをする方も少なくありません。日本赤十字社は救護班による医療支援やこころのケア、奉仕団による炊き出しなど幅広い活動で、被災者サポートを行ってきました。被災者の生活再建へ向けた義援金も11月30日まで受け付けています。皆さまの温かいご支援をお待ちしています。(4-5面に詳報)

CONTENTS

TOPICS

第25回国連軍縮会議
Enjoy Honda&
日本赤十字社
ジャーナルコミック発行
健康豆知識 不整脈

TOPICS

いのちと未来をみつめる
プロジェクト
元救護看護婦講演会
気象庁×赤十字
防災ワークショップ
長野マラソンチャリティーエントリー
常任理事会開催報告

SPECIAL

台風18号等大雨災害
教訓を生かした
医療救護活動
見えてきた
連携・協働の
新しい形

AREA NEWS

徳島・愛知・静岡・神奈川・香川
島根・山口・広島・山形・静岡
ウガンダ大統領夫人
乳児院訪問
ピアノジャック義援金活動
チャリティーバザー
赤十字回答
Voice&プレゼント

WORLD

東アフリカへの支援活動
南スーダンでの
医療支援活動
コラム 被爆70年
守るべきいのちと尊厳



今月の出会い



NPO法人 次代の創造工房理事長
ゆき あつ
秋沢 志篤さん

子どもたちの夢や目標を一緒に育てましょう

東日本大震災の復興を若者が主人公になって考えていく「STAND UP SUMMIT2015」(8月11日、東京ビッグサイト)の仕掛け人が秋沢さん。「復興には一人ひとりが自分の復興を掘り下げ、実践することが大切。また、周囲の人には、被災者の苦しい思いを理解してほしい。そうした機会を作るためのSUMMITです」と語ります。

目標が見つけれない現代の若者の増加に危機感を覚え、2006年にスポーツ選手や芸能人などが参加するイベント企画会社を設立。さまざまなイベントを通じて、子どもたちに夢や目標を持つ面白さを伝えていく会社です。これまでに各界を代表する250人近くの協力

を得てきました*。

その後、新たに立ち上げたNPO法人では、擁護を必要とする子どもたちの海外留学に取り組んでいます。「ヒーローに会ったり、海外交流を経験することで、夢や目標を持つことの大切に気づく子どもたちに出会うのが喜びです」と目を輝かせます。「日赤は、私たちと同じ目標を持って進んで行ける組織。次代を担う子どもに夢を育てていくため、これからも共に力を合わせていきたいと思います」

※(詳しくはSHIRASE心拓塾ホームページを参照
<http://www.shintakujuku.com/lecturer/index.html>)

PROFILE

1966年に共同石油に入社。89年エー・エム・ピー・エム・ジャパンを社内起業し、92年に社長就任。2006年に設立したヒーローズエデュテインメント株式会社で子どもたちの教育支援事業をスタート。6年前に脳梗塞を患い右半身まひの障がいを負うが、懸命のリハビリを経て復帰した。

第25回国連軍縮会議

「人道に反する核兵器の廃絶を」 IFRC近衛会長が世界に訴え

8月26日から28日まで広島市内で開催された第25回国連軍縮会議に、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)の近衛忠輝会長(日本赤十字社社長)が政府関係者が多いパネリストの中、数少ない人道援助機関代表として出席。核兵器廃絶を訴えるスピーチを行いました。



軍縮会議には日赤長崎原爆病院の朝長万佐男名誉院長も出席。2歳の時に被爆した自身の体験を話し、「原爆投下によって起きたことを次世代に伝えなければ。私も被爆者として出来る事をやりたい」と語りました

核兵器による被害の前には誰もなすべがない

「核兵器は人道的に堪え難い苦痛を与え、私たち一人ひとりの生命を脅かす」とスピーチ冒頭から訴えた近衛会長は、核兵器の使用が「国際社会の対応能力を超えた



近衛会長の広島・長崎への訪問は今年8月だけで3回目。「赤十字のネットワークを強みに、市民社会から核兵器廃絶の声を高めていきたいという思いは、被爆地を訪れる度に強くなります」

「人道外交」として進めていくことを決議。2013年にはより具体的な行動を盛り込んだ「4カ年行動計画」を採択しています。

近衛会長はスピーチの中で世界の赤十字のこうした取り組みについても紹介。また、NPT再検討会議で159カ国が核兵器の非人道性を告発する共同声明に賛同したことに触れながら「赤十字は国際人道法の立場から世界の国々に対し、核兵器廃絶を働きかけていきます」と改めて決意を表明しました。

エンジン Joy ホンダ&赤十字

モーターファンにAED講習

本田技研工業株式会社が開催するイベント「2015 Enjoy Honda」で、日本赤十字社はAED(自動体外式除細動器)体験を含む心肺蘇生の講習を

実施中です。8月22、23日にツインリンクもてぎ(栃木県)で開催された同イベントでも、大勢の来場者が挑戦。「もっと詳しくAEDについて知りたい」など好評を博しました。



つみきパズルで赤十字マークに挑戦中です

Enjoy Hondaは、同社の最新自動車やオートバイなどを「見て、遊んで、体感する」、モーターファンへの感謝イベント。毎年開かれていて、今年は4月から11月まで全国8カ所で開催

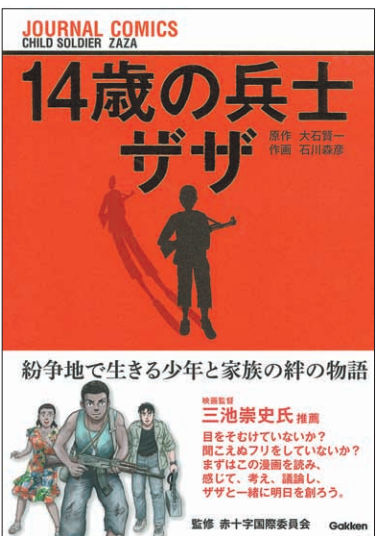
場では、栃木県支部の救急法奉仕団によるAED体験コーナーに加えて、青年奉仕団や青少年赤十字(JRC)による赤十字パズルなど子どもたちが参加できる企画も。献血の呼びかけも行われ、会場内の献血バスでは50人の方に協力いただきました。

タイアップ企画について同社からは「日赤のブースでは、看護服や救護服を着用できるキッズ体験コーナーをはじめ、普段ではなかなか触れる機会のないAED講習などを通じて、多くのお客さまに喜んでいただくことができています。今後もより一層のご協力を」と感謝のコメントが寄せられています。



子ども兵士、性暴力など紛争地の人道問題を描く ジャーナルコミック「14歳の兵士ザザ」

10月1日 発行



発行:学研パブリッシング A5判 222頁 定価1200円(税別)

ストーリー

舞台はコンゴ民主共和国。村を襲撃され、家族や家、すべてを失った14歳の少年ザザ。復讐に心を支配されたザザは武装グループの兵士となり、殺す側へと身を転じます。しかしある日、母親が大切に持っていたはずの笛を手に話しかけてくる日本人・神田と出会ったことで…。

知ってて良かった! 日赤のドクター&ナースが教える健康豆知識

⑰不整脈 9割方は安心 でも残り1割に怖い病気が

徳島赤十字病院

日浅芳一院長

脈拍の正常値は1分間におよそ60~100回。これよりも早くなったり、遅くなったり一定ではない現象が「不整脈」です。心臓は、自ら発生させる微弱な電気により動きを制御していますが、この電気の発生部分や電気の通り道に障害が生じること、不整脈は引き起こされます。

とはいっても電気系統の狂いは、イコール心臓の病気ではありません。多くは加齢に伴って現れてくる現象で、中年以上の大半が抱えています。また、強いストレスや過労などでも生じます。これらの9割方は治療の必要ありません。

しかし1割の不整脈には、いのちに関わる病気が

が潜んでいる可能性があります。例えば、心臓下部で電気の狂いが連続発生する「心室細動」は心臓突然死に直結。高血圧・糖尿病などの生活習慣病が不整脈と重なった場合に起きやすい「心房細動」は、重篤な脳卒中を併発する危険があります。また重度の不整脈では、脳に血液が回らずに失神したり、心臓に負担がかかり過ぎて心不全に至るケースも。

「健康診断で異常がない」と安心している人もいますが、ごく短時間の検査で異常を発見するのは実は困難。不整脈の自覚症状である動悸や心臓の空打ち感、息切れなどが現れた際に、これま

でに経験したことのない違和感を覚えた場合は要注意です。

不整脈の治療には、カテーテル(体内に挿入する細い管)を使い不整脈の源を断ったり、不必要な電気の通り道を切断する「焼却法」が根本治療として用いられるようになっています。手術は短時間、入院も3~4日です。また極端に脈が遅くなる不整脈にはペースメーカー、生命にかかわる早い不整脈には植え込み型除細動器の移植も一般的になってきました。いずれもリスクの少ない治療法なので、不整脈の自覚症状がある方は怖がらずに専門医を受診して欲しいと思います。



▲別の病気で処方された薬が不整脈の原因になっているケースもあるので、受診の際には服薬歴を記した「お薬手帳」を忘れずに

徳島赤十字病院
〒773-8502
徳島県小松島市
小松島町字井利ノ口103番
TEL 0885-32-2555 (代表)



戦後70年 いのちと未来をみつめるプロジェクト 3人の若者にまかれた 「いのちを未来につなげる種」

「あなたたちに、種をまきましたよ。この種を未来につないでください。」――19歳から25歳の女性3人が、被爆者や戦争体験者から話を聞こうと、9月2日から11日にかけて長崎、佐賀、福岡、山口、広島を訪問。ある戦争体験者からは、若い世代に未来を託す温かい言葉がかけられました。

自分たちが できることを

今回の訪問は、「戦後70年、いのちと未来をみつめるプロジェクト」として企画したもので、戦争体験者らと向き合うことで「いのちの大切さ」を見つめ直し、赤十字理念について考えていくのが目的です。青少年赤十字(JRC)加盟校での活動の経験が

ある元JRCメンバー2人と赤十字初体験の社会人1人が参加しました。長崎では被爆者の坂本トヨ子さんを訪ねました。原爆投下から70年の今年、初めて体験を語り始めたという坂本さん。その話に参加メ

ンバーの山下美咲さん(21)は「70年経った今も苦しみ続けている。その辛さって何だろう」と声を震わせました。「人のいのちが奪われること。それが戦争です」と体験を語る福岡県の三浦文子さんからは「あなたたちに種をまきましたよ」の言葉が。戦争の記憶を受け継ぎ、平和への芽を次の世代に育ててほしいという思いを3人はしっかりと受け取りました。

広島で会ったのは、救護活動に従事した元看護学生や被爆者の方たちです。当時看護学生でありながら広島赤十字病院内で勤務中に被爆し、院内での救護活動に奔走した林信子さんは「2週間後に初めて外に出たら、廃墟の中で、水道の蛇口から水がほとばしっているんです。水道局の人たちが必死で復旧させたんですね。私たちが患者さんを手当できたのはその水のおかげでした」と振り返りました。

3人は広島市内の袋町小学校平和資料館も訪問。終戦直後に15トンの医薬品を携えて広島に入り、被爆者救護を行った赤十字国際委員会駐日首席代表のマルセル・ジュノー博士の功績などを学びました。

「ジュノー博士も水道局の職員も、精一杯自分ができることをした。そうした行動こそが赤十字の目指す人道なのではないでしょうか」と口を揃える3人。「現地へ行くことでこれまで実感のなかった『いのちの大切さ』を知ることができました。この体験で感じ考えたことを今度は私たちが伝えていきたい」と抱負を語っています。



左から前田幸乃さん(19) 山下さん 岡田雪清さん(25) 広島での被爆体験を戸谷清子さん(右)から聞きました

元日赤救護看護婦が戦禍の体験語る

「あの苦しみを皆さんには味あわせたくはありません」

日本赤十字国際人道研究センターが9月7日に日赤本社で開催した戦後70周年記念講演会で、元日赤救護看護婦の木村美喜さん(87)が第2次世界大戦中のフィ

リピンでの過酷な救護体験を語りました。木村さんは昭和17年4月に日赤埼玉支部救護看護婦養成所に入所しました。しかし、3年課程のところ19年

3月に2年で繰り上げ卒業。同年8月に召集され、救護看護婦としてマニラの陸軍病院に派遣されたときはまだ16歳でした。

マニラ到着1カ月後に米軍の空襲が始まり、年末には250名の死者が出た。終戦の2日後、木村さんはパラチラスとマリアの間に40度以上の高熱に襲われます。片足も負傷し、山中

キロ北のバギオに移動。そこでも連日空襲を受けたため、多数の患者とともに山岳地帯での逃避行が始まりました。山を半歩半歩下りました。

「医薬品も食糧も尽きる中で終戦までの4カ月間、爆撃や機銃掃射、餓え、病気で多くの仲間の看護婦が亡くなりました。弱った体で同僚を埋葬するたび、『次に死ぬのは自分だ』と思うんです。涙がはらはらとこぼれてきました」



想像を絶する体験に、多くの参加者が目を潤ませながら聞き入っていました

木村さんは最後に、「あの苦しみを皆さんには味あわせたくはありません。私のいのちのある限り、戦地での経験を皆さんに伝えていきます」と語りました。

所属した第301救護班は26人のうち16人が死亡。「終戦があと10日遅かったら、私を含めて救護班は全滅していたはず」と振り返ります。

同支部と大会組織委員会では、パートナーシップ協定を締結しており、スポーツを通じた健康の増進とボランティア精神の向上に寄与するとともに、相互の連携による同マラソンの発展と社会貢献活動の推進を目指しています。

赤十字×気象庁 防災ワークショップ

香港の赤十字ボランティア9人が参加

中国紅十字会(※)の香港支部に所属する20代のボランティア9人が9月上旬に来日し、日本赤十字社と気象庁が同月4日に共催した防災ワークショップに海外

のメンバーとして初参加しました。日赤とボランティアパートナーシップ協定を結ぶ明治学院大学、上智大学の学生7人も参加し、同年代の若者同士、交流を深めました。

このワークショップは、防災教育の普及などに関する協定を日赤と締結している気象庁が開発したものです。大

雨により起こりうる災害についての講義の後、時間の経過とともに拡大する被害を想定しながら取るべき避難行動などについて、グループ討議を交えて学習しました。

ワークショップを終えた香港メンバーは「香港では、大雨が降ったときに避難所に行くという発想がない。避難所という新しい視点を得ました」「台風と大雨は香港でも最も多い災害で、勉強になりました。日本のメンバーからも、普段意識していないことが学べた。(香港メンバーとは)同じ条件のもと

で議論しても、意見が違ってくることが面白かった」などの感想が出されました。

※中国の赤十字社



ハートラちゃんと一緒に走ろう

長野マラソン チャリティー エントリ―募集開始

赤十字の活動資金を募るチャリティーエントリ―枠が設けられている第18回長野マラソン(平成28年4月17日)の参加申し込みが10月24日から始まります。一般参加費に1000円をプラスした同マラソンのチャリティーエントリ―は、東日本大震災翌年の平成24年にスタート。昨年までは震災義援金に。また2000人が同エントリ―に協力した今年からは

災害救護などの活動資金として長野県支部に寄せられます。同支部と大会組織委員会は、パートナーシップ協定を締結しており、スポーツを通じた健康の増進とボランティア精神の向上に寄与するとともに、相互の連携による同マラソンの発展と社会貢献活動の推進を目指しています。



チャリティーエントリ―参加者には、ハートラちゃんが描かれた赤十字支援マークを配布!

常任理事会開催報告

平成27年9月17日、本社において平成27年度第5回の常任理事会が開催されました。

記

1 予算の補正について
(長野赤十字病院の電子カルテシステム更新にかかる予算の補正)
審議の結果、予算の補正については原案のとおり議決されました。また、ユースボランティアの新たな取り組み、台風18号等大雨災害にかかる日本赤十字社の対応状況について及び予算の補正にかかる7月及び8月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

台風18号等大雨災害

教訓を生かした医療救護活動 見えてきた 連携・協働の新しい形

ブロック広域支援体制で対応

今回の支援活動にあたり日赤は「第2ブロック*支部広域支援体制」で臨みました。この支援体制は、首都直下地震などの大規模災害を想定し、準備してきたもの。東京都支部に調整本部を設置し、救護班の派遣や救護物資の調達などで茨城県支部の救護活動をサポートしました。

また、東日本大震災以降、養成に力を入れてきた日赤災害医療コーディネーターおよびコーディネートスタッフを派遣し、他機関と連携した救護活動を展開。支部やブロックに配備を進めてきたdERU（国内型緊急対応ユニット）や現地災害対策本部車両なども活用しながら、地域の医療機能復旧に貢献しました。

※第2ブロック＝東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、山梨県、群馬県、茨城県、栃木県、新潟県



きぬ総合公園（常総市）に設置された現地災害対策本部車両が、日赤の現地対策本部に。各県から集まった救護班活動の拠点にもなりました



「被災地医療の復旧に貢献」

さいたま赤十字病院 救急部副部長 田口茂正医師

（日赤災害医療コーディネーターとして茨城県常総市に派遣された救護班の情報集約や現地対策本部の立ち上げに携わる）

常総市では市内31か所の医療機関のうち、最も大きな病院である「きぬ医師会病院」を含む12か所が被害を受けました。同院と水海道さくら病院は、全入院患者百数十人を自衛隊や消防のボートで脱出させ、各地から集まったDMAT（災害派遣医療チーム）が県内の病院に医療搬送しました。もちろん日赤DMATもそこに加わっています。

医療機関がこうした被害を受ける中、私たちは今回、日赤救護班として単独で動くのではなく、地域の医師会をはじめとする関係機関との連携を重視。避難所の医療ニーズを情報共有したり、受け持つ地域を分担するなどの取り組みを進めました。

医療ニーズは現場で探す

茨城県支部の救護班は9月10日から、埼玉、千葉の救護班は11日から被災地に入りましたが、まず最初に行ったのがDMATとも連携した避難所のアセスメントでした。どの避難所にどのくらいの医療ニーズがあるのか、当初はまったく分からなかったからです。

日中の避難所は、被災者の多くが自宅の片づけに行っているので閑散としています。ところが、夜になると大勢の方が戻ってきます。その中には片づけ作業中にけがをされたり、体調を崩した人もいます。アセスメントで上がってきたこうした情報に基づき、市内3か所に救護所を設置しました。

得られた情報はDMAT活動拠点本部とも共有しましたが、それによって、アセスメントから抜け落ちた避難所があることが浮かび上がるなど、その後の活動につなげることもできました。

医師会病院の診療再開を支援

地域の医療機能の復旧に動いたのは日赤やDMATだけではなく。県、市の災害医療コーディネーターを中心に、医師会、看護協会、薬剤師会、歯科医師会などの県内多くの医療関係団体の代表が招集されたミーティングが12日には筑波大学病院内で開催されました。



医療搬送する日赤DMAT

日赤を代表して私もそこに参加し、日赤の活動を報告。この会議を通じて、県全体としての医療支援の中に、日赤の救護活動が位置づけられることになりました。具体的には、日赤は堤防が決壊した地区を中心に活動。市役所があるエリアは医師会などがカ



パーしていくことが決まりました。

医師会との連携は地域の医療機能の復旧に向けた取り組みを進める上でも重要でした。というのも、浸水被害で機能停止したきぬ医師会病院から「かかりつけ患者の多くは避難所にいる。外来診療だけでも再開できれば…」という相談をいただけたからです。神奈川・栃木・東京・千葉の各県支部の要員とともに、dERUを14日までに同院に派遣。その医療資機材を用いて、仮設診療所を設置し、同院の先生や看護師の皆さんが外来診療を再開しました。

dERUを用いて、地域の医療機関を補完・支援していくのは日赤として初の試みです。こうした連携は、災害時医療支援の新しい形になるのではないのでしょうか。

生かされた東日本大震災の経験

東日本大震災の経験を踏まえ日赤は「日赤災害医療コーディネートチーム」を平成25年から本社・支部に配備。災害医療コーディネーター研修を重ねてきました。また、震災で医療・救護活動の拠点となった石巻赤十字病院での経験を生かすために創設された「災害医療ACT研究所」（事務局：石巻赤十字病院災害医療研修センター内）でも実践的な研修を行ってきました。救護班による避難所アセスメントや他機関との連携など、こうした研修で私たちが学んできたことが、今回十分に生かされたと思っています。



地域医療調整会議で日赤救護班の活動を報告する田口医師（左）



きぬ医師会病院前にdERUを設置



備えの大切さを痛感

自宅で被災した



半田ノリ子さん(74)

「今回の災害ではたくさん勉強させられました。何か持ってきたのはいつも飲んでる薬だけ。災害時の備えは本当に大切だと痛感しました」(9月13日、避難していた市役所内で)

避難所内の救護所で手当を受けた



モリタさん親子

避難所の外で遊んでいたら、草で指を切ってしまったケンソウ君（今月号の表紙）。なかなか止まらない出血に両親が救護所に駆け込んできました。両親は「たぐさんの血に慌ててしまいました。すぐに治療していただき感謝しています」(9月12日、水海道小学校の救護所で)

被災者の見えない傷を癒す

こころのケアチーム出動中

多数の家屋流出や広範囲にわたる浸水被害から復旧し、日常生活を取り戻すには多くの労力と時間が必要。そうした負担を抱える被災者を、心理・社会的な側面からサポートしていくのが日赤の「こころのケア」活動です。9月24日現在、常総市にはこころのケア2チームが派遣され、県の災害派遣精神医療チーム（DPAT）と連携した取り組みを行っています。

「こころのケア」が求められるのは、住民被災者にとどまりません。自治体の職員や保健師などは、自らも被災しながら、地域全体を支えていかなければならず、大変なストレスに晒されています。こうした方がたをフォローしていく役割も担っています。



被災者に寄り添い、話に耳を傾けながら、見えないこころの傷を癒します

赤十字防災ボランティア

ボランティアの活動を 安全・健康面からサポート

浸水家屋の泥のかき出しや使用不能になった家具類の運び出しなど、被災者の生活復旧に大勢のボランティアが参加しています。赤十字防災ボランティアはこうした活動への参加と合わせ、安全・健康の専門知識などを生かした支援を展開しました。

1700棟に及ぶ浸水被害を受けた宮城県大崎市では、同市社会福祉協議会と連携を図りながら、ボランティアが安心して活動できる環境整備を実施。赤十字支援隊と名付けられた看護奉仕団などが、活動地域を巡回してボランティアの方がたの安全管理などを行っています。茨城県では、赤十字防災ボランティア4人が被災市町村の災害ボランティアセンター運営を支援し、ニーズのマッチング（活動場所の振り分け）などを行いました。



元看護師のメンバーで組織する看護奉仕団



避難所では地域の赤十字奉仕団が炊き出し。温かい食事を被災者に提供しました



救護物資の積み込みと運搬も赤十字防災ボランティアの重要な役割です

平成27年台風第18号等大雨災害義援金

被災者の生活再建へ 皆さまの温かいご支援を 心よりお願いします

受付期間 平成27年11月30日(月)まで

受付口座 郵便振替(ゆうちょ銀行・郵便局)

口座記号番号「00120-2-766741」/口座加入者名 日赤平成27年台風18号等大雨災害義援金

※窓口でのお振込みの場合は、振込手数料は免除されます。

※窓口でお渡する半券(受領証)は寄付金控除申請の際に必要となります。

※銀行振込み、被災各県支部の口座でも受け付けております。詳しくは日本赤十字社のホームページ

(http://www.jrc.or.jp/)をご覧ください。



阿波踊りで赤十字PR！ 支部長、院長、血管くんも



徳島県

街中が踊り一色に染まる徳島の真夏の祭典「阿波踊り」。8月14日の夜は徳島赤十字病院の「日赤連」約130人が、徳島市内の紺屋町、藍場浜の両演舞場に踊り込み、赤十字をPRしました。

県支部長を務める飯泉嘉門徳島県知事と日浅芳一院長のキレのある踊りに続いて、看護師らが華やかな女踊り、医師らが「ヤットサー」の掛け声にあわせて勇壮な男踊りを披露。先頭集団では、動脈硬化に特化した1泊2日の健康診断「踊る血管 阿波踊り健診」の受診者4人も心電計をつけながら阿波踊りを楽しみました。大観衆の前に飯泉支部長は「徳島赤十字病院ではいのちと健康を守っています」と健診の重要性や赤十字活動への支援を呼び掛けました。



飯泉支部長(写真中)、日浅院長(左)、踊る血管くんを先頭に紺屋町演舞場に踊り込む日赤連

包装食袋の炊き出しカレーで留学生と交流会



静岡県

藤枝市赤十字奉仕団と青少年赤十字加盟校である静岡高等学校の2年生計41人が、プロスペラ学院ビジネス専門学校に通う留学生10人との交流会を8月28日に開催。包装食袋(ハイゼックス)を使ったカレーライス調理と三角巾による応急手当などを学びました。

参加したのは、ミャンマー、スリランカ、ネパールからの留学生。奉仕団員が生徒、留学生に寄り添いながら一緒に作業し、会場は温かい雰囲気になりました。宗教上の理由で肉を食べることができない留学生もいましたが、一人分の材料をポリ袋に入れて調理する包装食袋なら、個々の事情にあった料理も同じ鍋で作れます。そんな利点を認識できる機会にもなりました。



留学生の一人は「レッドクロスは10歳の頃に勉強して以来、今日改めて学ぶことができました」

防災教育ゲーム「いえまですごろく」 6年生が初体験



愛知県

愛知県支部は、防災に関する企画や商品開発などを手がけるNPO団体yamoryとともに、防災教育ゲーム「いえまですごろく」を共同製作。9月4日には幸田町立幸田小学校の6年生児童がゲームを初体験しました。

ゲームは、家の外で一人で被災した際、「ものが落ちてけがをする」「困っている人を助ける」など災害時に起こりうる突発的な出来事や知識を学ぶもの。体験した児童からは「家に帰って防災について家族で話そうと思った」など、真剣な感想が出ました。同校での学習に先立つ8月23日には、愛知県青少年赤十字指導者講習会でも紹介され、「さっそく学校で実践してみたい」など好評を博しました。



「こんなときどうすればいいのかな？」みんなで協力しながらゴールを目指します

はじめての自炊応援講座 視覚障がい者が料理に挑戦！



神奈川県

日本赤十字社が運営する神奈川県ライトセンターは8月5～7日、これからひとり暮らしをスタートする視覚障がい者を対象にした「はじめての自炊応援講座」を実施しました。自炊を通じた生活の質の向上を目指すのが目的です。

講座は、ガス台や水場の配置、調理道具の種類・形などを手触りで確認することからスタート。肉を焼くときの音や匂い、菜箸から伝わってくる重さや感触の変化など視覚以外の感覚を大切にすれば、火を使う料理のハードルもクリアできることを学びました。講座終了後には「ガスは怖いと思っていたけれど、結構できるものですね」「コンロと仲よく付き合っていきたい」などの抱負が語られました。



木べらとフライ返し。形を手で確認してから、どちらが炒めやすいかを比較します

夏のチャレンジ JRCTレーニングセンター(トレセン) 輝く笑顔で 仲間と成長！



香川県 / 島根県 / 山口県 / 広島県 / 神奈川県

集団生活や学習・体験を通じて、「気づき、考え、行動する」力を育むのが、青少年赤十字(JRC)のトレセン。今年の夏も日赤の各支部で開催され、小学生から高校生までのJRCメンバーが、仲間との笑顔の中で、夏の思い出をつくりました。

香川県支部のトレセンは8月7～9日、五色台少年自然センターで開催され小・中・高生の計74人が参加。野外に設けられた関所を回るフィールドワークにグループで挑戦したほか、「防災教育プログラム」では防災・減災を学習しました。最終日のグループ発表では、クイズ形式やお芝居で学習の成果を披露する子どもたちの姿も。



手を離しちゃダメー！ 思いっきりからまった「人間知恵の輪」。一致団結して解けた頃には、みんなの心も体もほぐれます(香川県)



災害時の判断能力を養う竹ひごのゲーム(島根県)

県内84人のJRCメンバーが参加した島根県支部のトレセン(8月6～8日)では、JRCの国際交流事業として来日したモンゴル国青少年赤十字メンバー(高校生2人、赤十字職員1人)を招待。お互いの国の文化や、学校で取り組むボランティア活動の情報交換をするなど交流を深めました。



考えを深めるのに、意見交換は欠かせません(広島県)

青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのち ひろめるぼうさい」を活用した公開授業をトレセンで実践したのは、広島県支部です。8月19日の公開授業には、JRC加盟各校の指導者(教員)も参加。「災害時に力を合わせることで、瞬時に判断することの重要性を学んだ」などの声が聞かれました。



目の見えない不自由さを体験し、物事を考えるヒントに(神奈川県)

神奈川県支部は8月上旬から中旬に小・中・高ごとに実施。計106人のメンバーが参加し、救急法や防災、福祉体験、フィールドワークなど盛り沢山のプログラムに臨みまし。参加メンバーからは「参加前より積極的になった」「たくさんの『気づき』が力になると感じた」など頼もしい感想が出ました。



ワークショップで作った紙芝居を発表するメンバー(山口県)

山口県十種ヶ峰青少年自然の家で開かれた山口県支部のトレセンは46人の小・中・高生が参加しました。防災ワークショップや十種ヶ峰登山を含むフィールドワークなどに挑んだメンバーからは、「学んだことを学校で生かしたい」「仲間と協力することの大切さがわかった」などの感想がありました。

献血ルームで「夏休み☆親子おりがみ教室」



山形県

山形市の献血ルームSAKURAMBOで8月3日、親子おりがみ教室が開かれました。子どもたちに献血を身近に感じてもらい、未来の献血者を育むのが目的。約10人の親子が指輪など可愛らしい折り紙に挑戦しました。



山形市の献血ルームSAKURAMBOで8月3日、親子おりがみ教室が開かれました。子どもたちに献血を身近に感じてもらい、未来の献血者を育むのが目的。約10人の親子が指輪など可愛らしい折り紙に挑戦しました。



献血推進キャラクター「けんけつちゃん」も折れちゃうんです！

けんけつちゃんカフェオープン 未来のパティシエと献血コラボ



静岡県

気軽に献血に立ち寄っていただこうと静岡県赤十字血液センターは8月、県内7つの献血会場で「けんけつちゃんカフェ」を限定オープン。地元の製菓専門学校とコラボしたけんけつちゃんクッキーのプレゼントも。



学生ボランティアと職員がエプロン姿でおもてなし

気軽に献血に立ち寄っていただこうと静岡県赤十字血液センターは8月、県内7つの献血会場で「けんけつちゃんカフェ」を限定オープン。地元の製菓専門学校とコラボしたけんけつちゃんクッキーのプレゼントも。



せき

すう

じ

赤数字

答え

191人

赤十字語学奉仕団の団員数
(平成27年9月現在)

赤十字語学奉仕団(清水賢治委員長)は、語学を通して幅広いボランティア活動を行う日赤本社直轄の奉仕団。社会人を中心に学生から高齢者まで、さまざまな世代の団員191人が、障がい者スポーツ大会や青少年赤十字の国際交流活動への協力、来日する障がい者の支援など幅広い分野で活動しています。

同奉仕団のルーツは、昭和39年の東京パラリンピックに向けて結成された通訳奉仕団です。結団式では臨席された美智子皇太子妃(当時)から激励が寄せられました。学生を中心にした約200人の団員が14カ国語の通訳を分担し、世界から集まった車いす選手たちなどをサポート。こうした取り組みを大会後も継続していこうと、昭和40年に語学奉仕団として再スタートを切りました。今年11月には創立50周年を迎えます。

5年後には二度目の東京パラリンピックが開催されます。それに向けた新たな活動として語学奉仕団では医療通訳にチャレンジ中。その第一弾として今年2月からは大森赤十字病院の受付通訳ボランティアを始めています。

平成27年度海外たすけあい 事前キャンペーン

「赤十字シンポジウム2015」にご参加ください

毎年12月にNHKと共同で取り組む「海外たすけあい」。その関連イベントとして、世界の人道問題を探る「赤十字シンポジウム」を開催します。今年のテーマは、中東シリアで続く人道危機問題。紛争で犠牲になる市民生活や難民問題、求められる支援などについて考えます。

日時

平成27年11月7日(土) 14:00~16:00

会場

表参道ヒルズ スペース オー(東京都渋谷区神宮前4-12-10)

コーディネーター

出川展恒(NHK解説委員)

パネリスト

高橋和夫(放送大学教授)
玉本英子(アジアプレス ジャーナリスト)
渡部正樹(国連人道問題調整事務所=OCHA 神戸事務所長)

参加申し込み方法

(入場無料ですが、事前のお申し込みが必要です)
郵便はがき、FAX、インターネットのいずれかの方法でお申し込みください。詳しいお申し込み方法はホームページ(<http://www.nhk-p.co.jp/redcross2015/>)をご覧ください。

お問い合わせ: 日本赤十字社国際部企画課

TEL03-3437-7087(平日9~17時)

Voice & プレゼント

Voice

本紙に寄せられた読者の声をご紹介します!

私は高3が初の献血体験でした。その後、途中で妊娠、出産、海外赴任などがありましたが、現在33回の貢献をさせていただいています。子どもが4人いますが、そのうち3人は18歳で献血しました。1人は機会を逃していましたが、けがで何度かの出血をしましたので、「どうせ血を流すなら人のために出せば、けが病気で血を流すことはなくなるよ」(ほかの子ども3人は誰もけがや病気で血を流していないので)と、迷信をも込めながらお誘いしています。

— 鵜瀬恵子さん(埼玉県)

8月1、2日に放映されましたレッドクロス〜女たちの赤紙は大変な反響で、8月3日の朝礼に社長からもこのドラマについて話がありました。敵味方のない救護という赤十字の理念、理想と現実のギャップのジレンマ、人類はみな平等で平和でなければならない。家族愛、さまざまな事柄を今一度戦後70年を迎え改めて考え直すことができました。貴重なメッセージをありがとうございました。

— 森川麻美さん(広島県)

プレゼント

ガクケン(学生献血)応援キャラクターで女優の南沢奈央さんのサイン色紙を2名様にプレゼントいたします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)

②郵便番号・ご住所

③電話番号

④年齢

⑤赤十字NEWS10月号を手に入れた場所(例/献血ルーム)

⑥10月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか?(いくつでも)

⑦今月の出会い

⑧第25回国連軍縮会議

⑨Enjoy Honda&日本赤十字社

⑩ジャーナルコミック発行

⑪健康豆知識(不整脈)

⑫いのちと未来をみつめるプロジェクト

⑬元救護看護婦講演会

⑭気象庁×赤十字 防災ワークショップ

⑮長野マラソンチャリティーエントリー

⑯常任理事会開催報告

⑰特集 大雨災害 教訓を生かした医療救護活動

⑱エリアニュース

⑲ウガンダ大統領夫人 乳児院訪問

⑳ピアノジャック義援金活動

㉑チャリティーバザー

㉒赤数字

㉓Voice&プレゼント

㉔ワールドニュース

㉕赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他 Voice(読者の声)への投稿もお待ちしています。

応募先

● 郵 送 / 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
日本赤十字社 企画広報室 赤十字 NEWS10月号プレゼント係
FAX / 03-3432-5507
メール / koho@jrc.or.jp (件名「赤十字 NEWS10月号プレゼント係」)

応募締切

● 10月26日(月)必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。


「こころのケア」テーマに防災ボランティア研修会

兵庫

兵庫県

兵庫県支部は「こころのケア」をテーマにした平成27年度第1回赤十字防災ボランティア実践研修会を開催。特殊赤十字奉仕団員など赤十字防災ボランティア34人が参加しました。

阪神・淡路大震災を契機に注目された「こころのケア」。災害時には、被災者だけでなく援助する側も強いストレスを受けることから、こころのケアが求められていることが分かっています。研修会ではこころのケアの必要性や防災ボランティアの役割などに関する講義のほか、被災者役とボランティア役に分かれて行うロールプレイング(役割演技)で、被災者への接し方などを学びました。




ロールプレイングでは、熱のこもった参加者の演技に大きな拍手も

ウガンダ共和国大統領夫人が医療センターなどを訪問

ウガンダ共和国ムセベニ大統領とともに来日したジャネット・カターハ・ムセベニ大統領夫人が9月11日、東京・渋谷の日本赤十字社医療センターと同附属乳児院を視察しました。


日赤はウガンダ共和国北部のカロンゴ病院に医師を派遣しているほか、同国赤十字社とともに母子保健事業に取り組んでいます。視察を終えた大統領夫人は、日赤の医師派遣に感謝を述べるとともに「今後も医療従事者、特に医師や看護師の派遣を望みます」と話しました。



「東日本大震災を忘れない」→Pia-no-jaC←の2人ライブ通じた義援金募集を今年も継続中

ピアノを弾くHAYATOさんとカホンを叩くHIROさんのインストゥルメンタル音楽ユニット「→ Pia-no-jaC ←(ピアノジャック)」。東日本大震災の義援金を募る「ピースバンド」をライブ会場で販売し、収益金を被災地へ届ける活動を現在も継続中です。

2008年にデビューしたピアノジャック。オリジナリティー溢れる演奏が注目を浴び、ライブ会場には子どもから大人まで幅広いファンが足を運んでいます。ピースバンドの取り組みは震災の翌月からスタート。今年4月までに日本赤十字社に寄せられた義援金は約300万円になりました。9月に東京や大阪で行われたライブでも大勢のファンに協力を呼びかけました。




「震災が起きた時、メディアで伝えられる被災地の状況を見て何もできない自分たちに焦りと苛立ちが募りました。一日も早く復興してほしい。僕たちと協力してくれたファンの祈りが詰まったピースバンド。これからも被災地のため活動を続け、復興への思いを届け続けたいと思います」

13th album「BLOOD」 12月9日(水)発売 XQIJ-1011 / 1944円(税抜)

ライブ予定などはオフィシャルホームページ(<http://pia-no-jac.net/>)をご覧ください

大真協会がチャリティーバザー売り上げを寄付



大真協会の主催によるチャリティーバザーが9月5日、目黒区内で開かれました。

大真協会はこれまで、日赤本社内で行われている12月の「海外たすけあい」*バザーに参加してきました。今回のバザーは「これまで以上に協力したい」という同協会の申し出から実現したもの。バザー開催前には、赤十字の国際活動について会員の理解を深めるため、国際部職員が講師を務める研修会も実施されました。バザーには141人が来場。売り上げの約23万円は海外救援金として寄付されます。

*「海外たすけあい」は毎年12月に日本赤十字社とNHKが共同で取り組む募金キャンペーンで、今年も12月1日~25日まで行われます。

WORLD NEWS

南スーダン

東アフリカ諸国

東アフリカ諸国と日本赤十字社 「各国赤十字社の成長を促す支援をこれからも」

日本赤十字社国際部 東アフリカ地域代表(ナイロビ駐在) 五十嵐真希

地域紛争と難民、干ばつなどの自然災害、貧困と劣悪な保健衛生環境…。東アフリカ諸国*が抱えるこれらの課題に対し、日本赤十字社は保健衛生などを中心とした支援活動に取り組んでいます。日本赤十字社の東アフリカ地域代表として各国赤十字社や関係機関との調整などを7年間にわたり担当してきた五十嵐真希さんに話を聞きました。

*ウガンダ、ケニア、ソマリア、ブルンジ、タンザニア、ルワンダ、エチオピア、南スーダン、ジブチ

無限大の支援ニーズ

ケニアの都市部など経済成長著しい地域もある東アフリカですが、課題はまだ多くあります。日赤が地域保健強化事業に取り組むケニアの支援地の村では、子どもやお母さんが、乾季には川底を掘り、水をタンクに入れ1キロから5キロも歩いて運びます。重さは一つ20キロ。内戦でタンザニアなどに避難していた難民が戻ってきているブルンジでは、文字通り人びとは無一文で帰国。ソマリアやケニアではイスラム武装勢力によるテロ事件が頻発しています。ウガンダでは妊産婦死亡率がいまだ高い状況です。

日赤はウガンダで母子保健事業や医療支援事業、ケニアでは地域保健強化事業を進めるほか、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)を通じた難民・帰還民支援、保健衛生、栄養や生活向上の支援などにも取り組んでいます。

支援を円滑に進めるには地域住民の信頼を得ることが重要です。住民自身が「何をしなければならないのか」を考え、実行していくことが大切で、そのためには信頼関係に基づく協働が欠かせません。

日赤の保健衛生事業はこの考えに基づいて進められてきました。地元ボランティアの地道な育成を通じて、住民に保健・衛生の知識を普及。それによって、人びとの意識と行動を変え、医療機関での出産率や幼児の予防接種率の改善につなげています。

住民と赤十字の「夢」かなう

現地の人びとの粘り強さと、日赤の支援が結実した成果として、今年8月には支援地の一つケニアのガルバチュール県立病院に手術棟がオープンしました。

今までこの病院では簡易な処置しかできず、帝王切開や手術には100～200キロメートルも離れた他県の病院まで患者を搬送。救えるはずのいのちが失われるケース

が多くありました。地域の医師からこうした実情を訴える手紙を受け取ってからオープンまで5年。現地の関係者も私たちも本当にたくさんの困難を乗り越えてきました。

保健省の医師が「砂漠のオアシス」と表現したこの手術棟には、地域住民や多くの関係者の熱い思いが結集。周辺地域を含めた住民10万人のいのちを守る砦になってくれると信じています。

長期的、包括的な支援を

東アフリカ諸国の政情が不安定で、行政が役割を十分に果たしていない現状から、危険地域に入っていける唯一の人道支援団体として赤十字に対する期待はさらに高くなっています。ところが、社会が安定しない結果、各国赤十字社も十分な力を付ける



ケニア赤十字社のさまざまな広報に五十嵐さんの写真が使用されています

余裕を持ち得ていません。ですから、私たち日赤や国際社会の支援が不可欠。もちろん、支援は各国赤十字社の成長を促す方法で進めなければなりません。

7年間のアフリカの砂埃にまみれた汗と涙の結晶として、日赤は東アフリカにとっての重要なパートナーになっています。これを土台にして、医療や保健だけではなく、日赤の持つさまざまな資源を生かした包括的で息の長い支援関係を築いていくことが今後期待されると思います。

南スーダン紛争 ICRCが医療支援活動 赤十字の人道精神を胸に

熊本赤十字病院 大塚尚実医師

内戦が続く南スーダンで赤十字国際委員会(ICRC)の医療支援活動のスタッフとして派遣されていた熊本赤十字病院救急部の麻酔科医、大塚尚実さんがこのほど帰国。医薬品や医療機材が不十分な環境下での救護活動について報告しました。

「アフリカ最長の内戦」といわれたスーダン内戦。10年前の包括和平合意を経て、2011年7月に南スーダン共和国がスーダンから分離独立し、2013年には南スーダン赤十字社も承認されました。しかし、独立からわずか2年半後の2013年12月には民族間の衝突が発生し、南スーダンは再び紛争状態となっています。

ICRCは、南スーダン赤十字社と協力し

て、首都ジュバなどにある病院で医療支援を行っています。日本赤十字社も継続して医師や看護師を派遣しており、大塚さんは7月から約2カ月間、ジュバの軍人病院に拠点を置き活動。また、移動外科チームの一員として、上ナイル州南部の基幹病院として唯一機能している、マイウットの病院にも派遣されました。

「患者は若い兵士がほとんどです。多く

は戦闘により銃創などの傷を負っていて、一日平均3～5件の手術麻酔をこなしてきました。負傷して運ばれてくる兵士の中には『けがが治ったらまた戦う』という人もいます」

負傷兵の救護は赤十字の原点。その精神を胸に治療を続けた大塚さんですが「兵士の治療が内戦の加担にならないのかというジレンマを感じることもありました」と振り返ります。

先進国とは異なる医療現場への戸惑いもあったといいます。「薬剤は古典的なものが多く、使用に慣れるのが大変。また麻酔器や人工呼吸器がないため、必要な場合には手動の器具を使って人工呼吸を行います。五感を駆使した患者の状態把握が求められました」



手術麻酔を行う大塚さん(左)

紛争地域での医療支援活動には各国から派遣された医師、看護師が参加します。「彼らは生活が制限される中でも最大限に楽しめることを探し出すのが上手でした。緊張感のある環境でも心の余裕を持つことが大切だと感じました」と多国籍チームから学んだ点についても報告しました。

70年 守るべきいのちと尊厳 —核兵器のない世界へ—

二十歳の青春に ～長崎、救護看護婦が目にしたもの～

「大勢の患者の中でわが子をしっかりと抱きしめ眠ったままの姿で死んでいる母親、その母親の乳房にむしゃぶりつき、泣きじゃくっている乳児、死んだ者が苦しかったか、生きている者が苦しいのか、この時から皆の苦しみが始まったのです。昇天した人をムシロで包み川端で焼き、ただただ亡くなった人に心から念仏を唱えるだけでした。(中略)来る日も来る日もこんな勤務でした」(中辻典子、当時大阪日赤救護看護婦養成所一年生、四月に入学し数カ月しか教育を受けられないまま戦争の激化に伴い郷里の長崎県西彼杵郡に帰省中だった。手記は市内の救護所で目にした出来事)

「亡くなった母親の死体が大八車で運び去られるとき、傷ついた少年は起き上がることもできず自分のそばから永遠に去って行く母親の悲しい姿をじっと見送らねばならなかったのです。あの悲しそうな、そしてあきらめきった眼差し、原爆救護を回顧するとき忘れえないひとこまです」(上別府ケイ、日赤救護班要員として諫早から汽車で長崎入り)

「食事をする暇もなく私は病棟と手術室の間の廊下に立って、この方は手術室へ、ああこの方は向こうに(死亡)、この人は病室へと、多くの方を振り分けたのが思い出されます。病院の全職員不眠不休で、何百人の負傷者を

同時に収容、救護に専念しました。一夜明けて、広間の病室に患者さんの様子を見に行きますと、息絶えている人、髪の毛が抜けてぼうぜんとしている人、全身やけどでだれがだれやらさっぱりわからない人、腰のまわりだけシーツをかけているおばあさん、みんな語る言葉を忘れていました」(大久保キミヨ、昭和17年に日赤救護班要員として召集、大村海軍病院勤務)

「死に直面した人が苦しみあまり早く死にたいと思ってか、『看護婦さん早くゴザを持ってきてくれね、それに載せて下さいよ』と手を合わせるので(当時病院では、死亡したらムシロに載せて死体安置所に運んでいた)なだめるのに苦労した。夜勤一人で、一生懸命ほとんどその人にかかりきりでした(中略)感傷にひたれることも許されない時代でした」(長谷川和子、昭和19年日赤救護班要員として召集、佐世保海軍病院勤務)

「昭和二十年、私は二十歳で、大村海軍病院に救護看護婦として二年目を迎えていました。(中略)暗い夢のない記録ではあるけれど、原爆のすさまじさを体験した二十歳の青春に、燃えた若さを今は懐かしく思うばかりです。(内田良子、「当時の日誌から」と題した手記に寄せて)(『閃光の影で—原爆被爆者救護赤十字看護婦の手記—」)



日本赤十字社第362救護班要員(長崎県支部提供)